

一八八四年十月二十六日(日)

ドツキネーシヨル
南神村で信者たちと共に

ドツキネーシヨル
南神村でマノモハン、マヒマー等信者たちと共に

さあ行こう！ また、あの方に会いに行こう。あの大いなる人に、あの子供のような人に、大実母ママのことよりほか何一つ知らぬあの方に会いに行こう。私たちのために人間の姿をとってこの世に来られたあの方は、この難しい人生の諸問題をどう解決すべきか私たちに教えて下さるのだ！ 出家にも在家にも、いかなる宗派の人にもわけへだてなく話して下さるのだ！ 戸は開け放たれている！ 南神村ドツキネーシヨルのカーリー寺で私たちを待っていて下さるのだ。行こう！ 行こう！ あの方に会おう！

無限の徳をそなえ 喜びに輝く姿

その言葉を聞き ただ、ただ、涙！

さあ行こう。果てしない慈悲の海、やさしく可愛らしい姿。夜も昼も神の愛に酔ってニコニコ笑っていらつしやる聖ラーマクリシュナに会い、人間として生まれたこの一生を意義深く価値あるものにしてしよう！

今日は日曜日、午後二時頃。カルティク月白分七日目。西暦一八八四年十月二十六日、晩秋(ヘイマンク)の午後。タクルの例の部屋に信者たちが集まっていた。部屋の西側に半円形のベランダがあり、その前に路があつて南北に通じている。路(みち)の向こうは神前に供える花を植えた色とりどりの花園。その向こうは堤防で、その先には聖なる河ガンジスが南へ悠々と流れている。

今日は歓喜(ハザル)の市が立っていて、多くの信者が集まっている。聖ラーマクリシュナの祝福と神への愛が、信者たちの顔に映し出されている。何と素晴らしい！ こうした歓びは信者だけではなく、外の庭園や木々の葉、様々に咲き乱れる花やバギーラティー(訳註1)(ガンガー)の河面、太陽に照らされた青空、そして、ムラーリ(訳註2)(クリシュナ)の御足に触れ、ガンガーのしずくをふくんだ涼(すず)やかなそよ風にも歓びがあふれている。何と驚くべきことだろう！

地面におちている塵(アムリク)さえも甘露(アムリク)のようだ！ 自分ひとり(ひそ)で密やかに、或いは信者たちといつしよに、

(訳註1) バギーラティー——ガンジス河の別名。もっとも一般的なインド神話では、ガンジス河はヴィシュヌ神の足先から出て天界を流れるマンターキニーという名前の河であつたが、厳しい苦行を積んだバギーラタの願いによって、地上を流れるようになったのでバギーラティーと呼ばれる。その際、ガンジス河を地上に降下させる際の衝撃を頭髮で受け止める役目をしたのがシヴァ神である。

(訳註2) ムラーリ——五つの頭を持つ悪魔ムラの敵でクリシュナのこと。この件は、ブラフマーが、神の化身ヴァーマナ(矮人)(矮人)の足を洗ったのがガンジス河の起源であると説明するヴィシュヌ派の神話を暗示していると思われる。神の化身は十あると説くが、一般にはクリシュナを指す。

この塵の上を転げまわってみたい！ また、この庭の片隅に立つて、一日中すてきなガンガールの流れを眺めていたい。あるいは、庭の樹々やつる草、藪、それから葉や花がやわらかい光を反射している繁みに、まるで身内のように歓迎されて愛深く抱かれていたい。この庭の塵土の上を、タクール、聖ラーマクリシユナは散歩なさるのだから！ この藪やつる草のなかを通って、あの方は毎日行き来していらつしやるのだ！

また、青く光る秋の天空の一点を、じーっと見つめていたい！ 何故なら、地上も天国もひとしく、愛の喜びの水のなかで泳いでいるのが見えるから！

寺院の役僧たちも、門番も、使い番も皆、ごく親しい人のように思われる。この土地のさまざまな光景が、なにか生まれ故郷のように、甘くなつかしく感じられるからだろうか？ 空、ガンジス河、神々のお堂、庭の小路こみち、木の茂み、つる草、竹藪、職員たち、座についている信者たち、すべてが舞台の一場面シーンのようにまことにうまく配列されている感じだ。そのなかにおさまっている聖ラーマクリシユナ、この方がきつとこんなふうになすつたのだろう！ 蠟細工の庭のように、木、花、葉、みんな蠟ろうでできている。庭の路みち、庭師、庭にいる人たち、庭のなかに立っている家、みんな蠟なのだ！ ここにあるものはみな、あの方が喜んでお創りになったのだ！

マノモハン、マヒマーチャラン、校長、そのほか大ぜいの信者が来ている。やがて、イシャン、フリダイとハズラーも集まってきた。バララームとラカールはまだ、プリンターヴァンに滞在している。近頃、また新しい信者たちが来はじめた。ナラヤン、パルトウ、若いナレイン、テジチャンドラ、ヴィ

ノド、ハリパダなどである。バブラームは時々来て泊まって行く。ラーム、スレシユ、ケダルおよびデベンドラたちも頻繁に来てゐる。ある者は毎週末に、ある者は一週間おきにといふふう定期的に来る。ラトウはずっとここに住みついでゐる。ヨーギンの家は近いので、殆ど毎日のように来ている。ナレンドラは時々来るが、彼が来ると、この部屋は喜びの市場バザールになる。彼がその希有な美声で讃歌をうたうと、すぐタクールは恍惚となられ、三昧にお入りになるのが常だ。あたかも特別な祝祭のようである。タクルの希望で、青年たちのうち誰かが必ず、一日中おそばについてゐる。若者の魂は純粹で、結婚とかその他の俗事に縛られていないので、心から愛しておられる。

タクールに言われて、バブラームは時々、泊まっていく。アダル・センもまた、足繁く通つてゐる。部屋の床の上に信者たちは坐つてゐる。タクール、聖ラーマクリシュナは子供っぽい姿勢で立ち、何か考へていらつしやる。信者たちはその姿をじつと見てゐる。

[区別できぬもの、区別されたもの (The Undifferentiated and the Differentiated)]

聖ラーマクリシュナ(「マノモハンに)みんな、ラーマに見えるよ! お前たちがみんな坐つてゐると、ラーマがみんなの一人一人になつていなさるということがハッキリ見えるんだ」

マノモハン「はい、ラーマがあらゆるものになつておられます。でも、あなた様がいつも仰せられるように、アポ・ナーラーヤナ——つまり、水はナーラーヤナ(宇宙神の一名ですが、飲める水もあり、顔や手を洗う水もあり、汚れものを洗う水もあり、ということになりますか……」

聖ラーマクリシユナ「うん。だけど、とにかくすべてがああ御方(神)なんだ。あの御方が、生き物と世界になつていなさるんだ」とおっしゃって、小さい方の寝台の上にお坐りになった。

〔聖ラーマクリシユナの誠実への情熱と蓄えることへの嫌悪〕

聖ラーマクリシユナ「(マヒマーチャランに)なあ、ホントのことを言わなけりゃいけないからって、わたしは潔癖(けつぺき)すぎるよねえ！ 何かの拍子にヒヨイと食(た)べない」と言ってしまったら、もう死ぬほど腹ペコでも食べるわけにいかない。ある人に、『ジャウタラにわたしの水壺を持って来てくれ』と言ったら、もし別な人が持つてきたら、戻らせなけりゃならん。困ったものさ！ 何かいい工夫はないかしらん！

おまけに、何一つ持つて歩けない。キンマでも、食べるものでも——どんな品物でも持つて歩けないのさ。それは貯(たくわ)める(た)ことになるからね。手に土くれを持つて歩くこともできないんだよ」
このとき、ある人が部屋に入つてきて、「先生！ フリダイ(原註)がジヤドウ・マリツクの別荘(ドッキネーシヨル寺院のすぐ南に隣接している)に来ていて、門のところであなた様にお会いしたいと言っています」と申し上げた。聖ラーマクリシユナは信者たちに向かって、「フリダイにちよつと会つてくる。お前たちはこのまま居ておくれ」とおっしゃって、黒塗りのサンダルをつつかけて東の方にある門に向かつて歩いて行かれた。校長が一人だけお伴について行つた。庭の路(みち)は赤い煉瓦粉を敷きつめてある。その赤い道をタクールは東の方へとお行きになる。路(みち)に寺の管理人が立つていてタクールにあいさつ

をした。南の内門を出たところにヒゲを生やした門番が坐っていた。左手にはクティ——寺の持ち主が使う建物がある。以前、ここにニールクティ（インド藍の小屋）があつたので、この場所をクティと呼んでいるのである。その先の路の両側は花の咲いた灌木がずっと続いて——真南のそう遠くないところに、ガジタラと大実母カーリー堂の池におりる八段ガートが見える。東門に近く、左側に門番小屋と、その南にトゥルシー棚がある。境内の外に出てみると、ジャドウ・マリツクの別荘の門のところをフリダイが立つていた。（訳註、トゥルシー——聖なる木として非常に珍重されている植物）

お世話係——近くで立つて待っていた

フリダイは手を合わせて立つていた。タクールを見るや否や、大通りに棒切れが倒れるようにひれ伏した。タクールが、「立て」とおっしゃった。フリダイはまた合掌して、子供のよう泣いている。何ということか！ タクール、聖ラーマクリシユナも泣いていらつしやる！ 目のはしに涙の粒が次々とふくれれ上がっている！ タクールは涙を掌てのひらでおさえて、下に落ちてこないようにしておられる。

（原典註1）フリダイ——フリダイ・ムコバッターエはタクールの甥にあたる。タクールの生誕地カマールプクル村の近くのシオル村にフリダイの家がある。約二十年間タクールの許に住んでいて、南神寺院ドゥキネーシヨルマー・カーリーの司祭として勤め、また、タクールの日常のお世話をしていた。彼は寺院の有力者たちの不興をかっていたので、寺院内に入ることができなかった。フリダイの母方の祖母がタクールの父の妹（ラームシーラー）。（ベンガル語での発音は、リドイであるが、編集にあたってはデーヴァナーガリー表記に従って、フリダイとした——編集者）

何ということだろう！ご自分をさんざ苦しめたフリダイのために走って出てこられて！しかも泣いていらつしやるとは！

聖ラーマクリシユナ「今になって、どうして来たんだい？」

フリダイ「(泣き泣き)あなたに会いに来たんです。私の悲しみを、ほかにどこに行つて話せばいいんですか？」

聖ラーマクリシユナ「なぐさめるように微笑んで)この世に悲しみはつきものだよ。世間で暮らしていれば、幸福も不幸もある。(校長を見て)だから、この人たちも時々ここへ来るのさ。来て、神様の話を少し聞けば、心が安まるんだよ。お前は、何を悲しんでいるんだい？」

フリダイ「(泣きながら) あなたのそばから追い出されたので、それが辛いのですよ！」

聖ラーマクリシユナ「お前がこう言ったんじゃないか——『あなたはあなたのやり方でお暮らしなさい。私は私のやり方で暮らします』って」

フリダイ「はい、それはそう言いましたよ。私は何もわからなかつたんです」

聖ラーマクリシユナ「今日はこれで別れよう。また、いつか日を変えて来たときにいっしょに話そう。今日は日曜日だから、大勢、人が来ていて待つてゐるんだよ。郷里ではこんど作物の出来はどうだたい？」

フリダイ「ええ、そう悪くはありません」

聖ラーマクリシユナ「じゃ、今日はさよならだ。また日を改めて来いよ」

フリダイは再び路上にひれ伏して別れのあいさつをした。タクールはその路みちを戻って歩きはじめられた。校長がいつしよである。

聖ラーマクリシユナ「校長にわたしの世話をしてくれたが、それと同じくらい苦しめてもくれた！ わたしが腹を悪くして骨と皮ばかりになって何も食べられないときに、わたしにこう言つたよ——『私の食べっぷりを見てごらん。あなたは自分の心掛けで食べられなくしているんですよ』それから、いつもこう言っていたよ——『バカな人だ。私がおこにいなかったら、あなたのサードウ振りはどうなることか——』」

あまりいやな思いをさせるので、わたしは満ち潮に身投げをしようとして、ガンガの岸辺につ立っていた日もあったよ！」

校長はこれを聞いて感動していた。すばらしいことだ。こんな人物のためにこの方は涙しておられるのだ。

聖ラーマクリシユナ「（校長に向かつて）まあでも、ずいぶんよく尽くしてくれたよ。——なのに、どうしてこんなことになったのかな？ 子供を育てるような按配あんばいにわたしの世話をやいてくれたんだ。わたしときたら、あの頃、夜となく昼となく意識がなくなってしまうし、おまけに長いこと酷ひどい病気だった。わたしは、あれがしてくれる通りに、ただ、従っていたものさ」

校長は返事のしようもなく黙っていた。多分、フリダイは無私の気持ちでタクールに仕えていたのではなかったのだろう。——そう心のなかで考えていた。

話をしながら、タクールは自室へ戻られた。信者たちは待ちかねていた。タクールは再び小寝台にお坐りになった。

信者たちと——さまざまな問題について——バーヴァ、マハーバーヴァの秘密

マヒマーチャランの隣に、コンナガルから来た信者が数人坐っていた。そのなかの一人が聖ラーマクリシュナとしばらくの間、話し合った。

コンナガルの信者「うけたまわりますと、先生は恍惚状態ハイヴアになられたり、三昧サマーデーにお入りになったりなさるそうでございますが、どうしてそうなるか、またそれはどんなふうになるものか、ご説明いただけます」

聖ラーマクリシュナ「ラーダーマハーハイヴア（クリシュナの恋人）がよく、大恍惚状態マハーハイヴアに入っていた。友だちがラーダーの体にさわろうとすると、ほかの友だちがこう言つて止めた——『クリシュナの恋人の体にさわらないで。この人の体の中で、今クリシュナが楽しく遊んでいらつしやるんだから——』」

神に触れたことのある人でなければ、バーヴァやマハーバーヴァにはなれないよ。深い水の中から魚が上がつてくれば水は揺れ動く。それがデカイやつであれば、水はバシャーツ、バシャーツと大揺れだ。だからバーヴァになると——笑つたり、泣いたり、踊つたり、歌つたりする。

バーヴァは長い間つづけてはられない。鏡の前に坐つて自分の顔ばかりいつまでも見ていたら、人々はこいつは気狂いかと思うだろう」

コンナガルの信者「先生は神様にお会いになるようですが、私どもにも会わせていただけませんか？」

〔奉仕カレルマか修行をしなければ見神はあり得ない〕

聖ラーマクリシュナ「さあ、すべては神様の思召し次第でね——人間に何ができる？ あの御方の名を称とよえているうちに、涙が出る場合もあれば、出ないこともある。あの御方を瞑想していても、その日によって心がとても高まるときもあるし、なんともないときもある。

とにかく、働くことが必要だ。霊的な働きだよ。そうすれば神に会える。——いつだったか前バーツ三昧のとき、郷里くのハルダル池（原典註②）が見えた。そこで一人の低いカーストの村人が水草をかきわけては水を手のひらですくい上げ、何度も何度も、ためつ、すがめつ見ているんだよ。

これはね、水草をかきわけなければ水は見えない、という啓示だと悟わかった。——つまり、働かなければ神への信仰も得られぬ、もちろん神を見ることもできない、というわけなんだよ。霊的な働きとは、瞑想、神の名をとなえること、讃歌をうたうこと。それから、寄付をしたり、報いを思わずに他人に尽くすことも働きた。

（原典註②）フーグリー地方のカマールブル村にタクール、聖ラーマクリシュナの生まれた家がある。その家のすぐ前にハルダル池ツルという大きな池がある。

バターがほしければ、牛乳を凝こらせなければならぬ。それから静かなところへ置く。その後で凝こり乳をせつせとかきまぜる。すると、やっとバターがとれるというわけだ」

マヒマーチャラン「おっしゃる通りです。働きが必要なことは申すまでもありません！ 一生懸命に努力して、人はやつと悟れるのです。読むものだってどれ程あることか！ 聖典、経典は数知れぬほどあります！」

〔知識(智慧分別)が先か——神をつかむことが先か?〕

聖ラーマクリシュナ「(マヒマーに向かつて) 聖典をどれだけ読めばいいのかね? ただ議論しただけでどうなる? 先ず、あの御方をつかもうと努力することだ。師の言葉ズルを信じてとにかく働くことだ。グルがいなかったら、熱心にあの御方に祈ってお願ねがいすることだ。そうすれば、あの御方がどういうものか、あの御方ご自身が知らせて下さるよ。

本を読んだだけで何がわかる? 市場バザールに着かないうちは、遠くからワーワーというざわめきが聞こえるだけだ。市場に着けば、話は全く別だ。何でも見られるし、はっきり聞こえる。『お芋をおくれ』

『あいよ、じゃ銅貨おかねをおくれ』——何でもはっきり見聞きみきできるよ。

海から離れていると、ゴーゴーと遠鳴りが聞こえるだけ。近くまで行けば、舟が何艘そういて、カモメが飛んでいて、波が高くて——みんな見える。

本を読んだだけじゃ正しい理解はできない。たいへんな違いだな。あの御方を見た後では、本もお

経も、サイエンスとやらも、皆、藁クズのように感じるよ。

大旦那さまと話をすることが肝心要なんだ。大旦那に会いもしないで、あの方には、お屋敷が何軒あるんだらう、どこどこに別荘があるんだらう、株券はどれだけ持っていないさるだらう、なんて一生懸命に考えていたって、いったい何になる？ 執事や門番のところに行っても、すぐに追いかれるだけだ。株券の話どころのさわぎじゃないさ！

でも、何とかして大旦那と一度会いさえすれば——たとえ塀を乗り越えても、コッソリ裏口から忍び込もうと、とにかく何とかして会いさえすりゃ、家のこと、別荘のこと、株券のこと、何でも大旦那自らが話して下さるさ。（原典註 3） いちど大旦那と顔見知りになったら、そのあとは執事も門番もみなお前におじぎをするようになるよ」（原典註 3）（一同笑う）

信者「さて問題は、どうしたら大旦那と話をすることができるようになるか、ということでございましょう？」（一同大笑）

聖ラーマクリシユナ「だから、働けと言うのさ。神様は存在する、と口でだけ言って坐りこんでいたんじゃダメだよ。何とか工夫努力して、あの御方のそばまで行くことだ。静かなところで一人になっ

（原典註 3） Seek ye first the kingdom of Heaven and all other things shall be added unto you. 「まず神の国と神の義とを第一に求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて、与えられるであろう」（マタイによる

福音書 6 章 33 節）

て、一生懸命あの御方を呼べ、折れ。会って下さいと言つて夢中になつて泣け！ お前たちは女と金のためなら狂つたように走りまわるくせに——。そんなら、あの御方のためにちよつとも狂つてみる！ 神を求めて熱心のあまり、あの人は頭がオカしくなつたと言われてみる。女房子供のためなら水が一杯も涙を出すくせに、たまにはあの御方のために泣いてみる。何日か世間のことをすべて忘れて、あの御方を呼んでみる。

口でただ、神はたしかに存在する。なんて言うだけで、怠けて坐りこんでいたらどうにもならんよ。ハルタル池には大きな魚がいる。だが、池の端はたに坐りこんでいるだけじゃ魚はとれないだろう？ エサの用意をして水に投げこめ。すると、魚は深い水底から上がってくるから水が動く。何ともいえぬ嬉しさだ。魚の姿がチラツと見えて、次にドボンと水しぶきを上げてとび出す。それを見たらどんなに嬉しいことか。

牛乳を凝こらせて、かき混ぜて、それから始めてバターがとれるんだよ。

(マヒマーに向かつて) まつたく厄介なこつた！ 神さまを見せて下さい、なんて言つて、ご本人は坐りこんでいなさるんだからね。バターをつくつて、口まで運んでくれというわけさ(一同爆笑)。まつたく世話のやけることだ。魚をとつて手に持たせてくれ、と言うんだから。

ある人が王様に会いに行った。王様は七つの門をこえた奥殿にいなさる。最初の門を通るが早いか、『王様はどちら？』と、急せぎ込んでたずねた。王様はね、七つの門を一つ一つ通過してからでなけりや、会つては下さらないんだよ！』

「神をつかむ方法——熱心」

マヒマーチャラン「どのような働きをすれば、神をさとることができのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「これをすれば悟れるが、あれをしても悟れない——というようなものではないんだ。すべてはあの御方のお恵み次第だね。それでもやはり、一生懸命になって何かの方法で働きかけなければいけない。大事なのは熱心であること。一生懸命になるとあの御方は同情してお恵みを下さる。

でも、ある種いの条件が要ることはたしかだね。サードゥとつきあうこと。識別心グイゾーカがそなわっていること。真の師グル(サットグル)をもつこと。

それから、一番上の兄さんが家庭の面倒を全部みてくれるとか、妻が賢明で大そう宗教的であるとか、または、はじめから結婚しないとかで、世間に縛られなくてもすむ境遇——こんな条件がいくつも具そなわっていれば成功するよ。

ある家で重病人が出て、今にも死にそうな様子だ。見舞いに来た誰かがこう言った。「スワティー星座が上がったときに雨が降って、その雨水が人間の頭蓋骨に溜たまって、そこへ蛇が蛙を追っかけて来て、蛙が蛇にかまれようとする瞬間に飛んで逃げ、その拍子に蛇の毒が頭蓋骨の水の中に落ちる。その毒水で葉をつくって病人に飲ませることができたら、命が助かるだろう」

その人は、重病人のために決心した。暦こよみをよく調べて、スワティー星座の上る頃を見はからって出

発し、一生懸命にそれらしき場所を探した。心の中で神に祈りつづけながらね——『神様！ あなたがあの条件を集めて下さってはじめて叶うことです！』

歩いてゆくと、何と真正正銘の人間の頭蓋骨がころがっていた。やがて、夕立が降ってきた。彼は祈った——『ああ、私の師である神様！ 頭蓋骨も見つけましたし、スワティー星座からの雨も降りました。雨水は頭蓋骨に溜まりました。こんどは何とぞ、お恵みによつて他の条件をお授け下さい。神様！』

するとそのとき、毒ヘビがこつちにやってくるのが見えた。彼の胸は喜びのあまりドキドキしてきた。そしてまた祈った。『おお、師なる神よ！ 蛇まで来ました。沢山の条件が満たされました。お恵みをもつて残りの条件をお授け下さい！』言っているうちに蛙がとんできて、蛇はさっそく蛙を追いかけて食べようとした。頭蓋骨のところへ来ると、蛙はピョンと飛んであつちの方へ逃げた。口をあけて追いかけてきた蛇の毒は、頭蓋骨のなかにタラリと落ちた。彼は嬉しさのあまり手を拍ちながら踊り出した。

と、いうわけだからね。熱心につづけていさえすれば、あらゆる事が叶うんだよ」

出家生活と家住者——神を悟ることと放棄——真のサンニヤーシンは誰か？

「とにかく、心の中からよけいなもの全部捨ててしまわなければ神はつかめない。

出家はものを蓄えない。鳥と遍歴僧は貯蔵しない！——鳥と出家は蓄えをしないものなんだ。私ときたら、土(用便の後始末に使う)さえ持ち歩けないんだ。袋にキンマを入れて運ぶことも出来ないん

だよ。(訳註、鳥と遍歴僧は……)——インドのことわざ。ダルヴェシユはイスラム教の遍歴僧スーフィーのこと)

以前にフリダイが、あんまりわたしをいじめるので、ここを出てベナレスへ行つてしまおうという気になった。着るものは少し持つていこうと思つたけど、このわたしが、どうしてカネを手に持つてゐる？ だから、とうとうベナレス行きはオジャンさ(一同笑う)。

(マヒマーに向かつて)でもまあ、お前たちは在家だからね、これもやり、あれもやりしたらいい。つまり、世間のこともし、宗教のこともしろということだ」

マヒマー「これとあれは両立するものでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「わたしは五聖樹の杜の近くのガンジスの岸辺で、片手に金貨、片手に土くれを持つて、よくよく思索した。土くれは即ち金だ。金は土くれなんだ、とね。そして金貨をガンジス河に放り投げた！

そのとき、ちよつと心配になつたよ。ラクシュミー(富の女神)をないがしろにしたんじゃないかと思つてね。ラクシュミー母さんが怒つて食べものをくれなくなつたらどうしよう。そこで、ハズラーのように策略を思いついた。すぐこう言つたよ——ラクシュミー母さん！ どうぞ、わたしの胸の中に住んでおくれ！ とね。

ある人の苦行を喜んだ大実母が、こうおっしゃつた。——「お前、感心だね。何か願いごとを一つ叶えてあげよう』すると、その人はこうお願いした。「大実母よ、願わくば、孫といつしよに金の皿でご飯が食べられますように——」一つの願いで、子孫繁栄と、金の皿で食事ができるような大財産

とをモノにしたわけだ！（一同笑う）

心の中から女と金がすっかり捨ててきたら、心は神の方へ向いてピツタリと合うようになる。神に背を向けたとたんに縛られるんだよ。天秤計りの下の針が上の針から離れるのはどういう時だね？一方の皿に女と金が重くのっかっている時さ。（上の針は固定してあり、下の針がバランスに応じて左右に動く）赤ん坊は生まれる時、どうして泣くと思う？『内なにいたのに――。神様とピツタリ一つになつていたのに――』生まれ出ると、こう言つて泣くんだよ――『どこ？　ここは――。どこ？　ここは――。こんなところに来てしまった。神様の蓮華の御足を瞑想していたのに、またこんなところに来てしまつた！』と言つてね。

お前さん達の場合は、心のなかで捨てなさい。世間のことは無執着でやりなさい」

〔世間を捨てることは必要か〕

マヒマー「あの御方のところに心がすっかり行つてしまつても、なお、この世の中に住んでいなければならぬのですか？」

聖ラーマクリシュナ「どうしてさ？　世の中に住まないで、じゃ、どこへ行くんだい？

わたしはどこに住んでいても、そこがラーマの都、アヨーディヤだと思つてゐる。この世界、この世はラーマの都アヨーディヤだよ。

ラーマは師のもとで智識を得たあと、『私は世を捨てる』と言いなすつた。心配した父王ダシヤラ

夕は息子を説得してくれるようにと、賢者ヴァシシュタをさし向けた。賢者はラーマ王子の激しい離欲の心を読みとり、こう言った——

『ラーマよ、私といっしょによく考えてみよう。それから世を捨ててもおそくはない。

では、聞くがね——この世は、神の外にあるのかい？ もしそうなら、サツサと捨てたらいいだろう』

そのときラーマは心の底から悟った——神ご自身が、人間やこの世界すべてのものになっていなさることを。そして、あの御方が実在するからこそ、この世のすべてのものは本当にあるように感じられるのだ、ということ。——ラーマはそこで黙ってしまった。

世の中で暮らしていると、色欲や怒りの心と戦わなければならんし、欲望や執着心とも戦わなければならん。戦はね、砦から討つて出た方が有利なんだよ！ つまり、家にいて戦った方がいい——食べられるものもあるし、法律で認められた妻がいろいろ手助けをしてくれる。いまは末世で、生命は食べ物に頼りきっているのだ。一食のために托鉢をして七軒もの家をまわるより、一軒で間に合った方が便利だからね。家に住むことは、砦の中から戦いに討つて出るようなものだ。

それから、風のなかの枯葉のような気持ちでこの世に住んでいなさい。風は枯葉を家の中に運んでいったり、ゴミの山に運んでいったりする。風の吹くまま、どこにでも飛んでゆく。結構な場所だったり、ひどい場所だったり！ 今、お前を、あの御方は世間という場所に置きなすつただよ。けっこうじゃないか。今はその土地に住んでいろ——またそこからもっといい場所に運んで落して下すつたら、そのときはまた、そのときに考えればいい』

〔世間において神に全託せよ(Resignation)——ラーマの思召し〕

「あの御方がこの世に置きなすつたのだ。しようがなからう。もういっせ、何もかもあの御方に任せきれ。あの御方に、素直になつて自分を任せ切つておしまい。そうすりゃ、何の心配も面倒もない。そうしたら、すべてはあの御方がやっていなさるのだ」ということがわかつてくる。すべてはラーマの思召し」といふことがね」

一人の信者「ラーマの思召し」といふのは、どういふお話でございますか？」

聖ラーマクリシュナ「ある村に一人の機織職人が住んでいた。大そう信心深くて心掛けのいい人なので、誰もが彼を信用して愛していた。この職人は市場に行つて自分の織つた布を売っていた。買手が値段を聞くとこう言う——『ラーマの思召しで糸の値が一タカ。ラーマの思召しで工賃が四アナ。ラーマの思召しでもうけが二アナ。だから布の値段は、ラーマの思召しで一タカ六アナになりやす』人びとは彼を心から信用していたので、値切りはせず、すぐその金を払つて布を買つてゆく。

熱心な信仰者だから、夕方食事をすませると、チャンディー(ドゥルガー)を祀つてあるお堂の前に長いこと坐つて、神を想い、称名讃歌を称えるのが常だった。ある日のこと、夜も更けたが一向に眠くならないので、坐つて時々バコを吸つていた。するとそのとき、前の道を一群の盗賊が強盗しに行くために通りかかった。そいつらは荷物運びの手が不足していたので、その職人の家に入つてきて、『おれたちといっしょに来い』と言つて引っぱつて行つた。それからある家に押し入つて強盗を働いた。

いくつかの品物を機織職人の頭にのせて運ばせた。そこへボリスがやってきて、盗賊どもは皆いち早く逃げたが、職人だけは頭に盗品をのつけたまま捕まった。その夜、彼は警察に留置された。

翌日、職人は署長の前に引き出された。村中の人が事件のことを知って集まってきたよ。そしてみんなは口をそろえて言った——『署長さま！ この人が盗みなどするはずがありません』署長は職人にきいた——『どうしたんだね、どういいうけなのか、昨夜からのことを話してごらん』職人は答えた——『署長さま！ ラーマの思召しで、あつしは昨晚おまんまを食べました。それから、ラーマの思召しで、チャンディー（ドゥルガー）の前に坐りやした。ラーマの思召しで、夜が更けていきやした。あつしはラーマの思召しで、あの御方のことを想い、称名したり、讃歌をうたったりしておりやした。そんなときラーマの思召しで、強盗の一団が通りかかったんでござえやす。ラーマの思召しで、あいつらはあつしの手をつかんで引っぱっていきやした。ラーマの思召しで、あいつらは一軒の家に押し入りやした。ラーマの思召しで、あいつらはあつしの頭に荷物をのせやした。ちようとそのとき、ラーマの思召しで、ボリスの旦那がおいでなすって、あつしは捕えていただきやした、はい。

それからラーマの思召しで、留置場に入れていただきやして、それで今朝はラーマの思召しで、こうして署長さまに……』

信仰篤い正直な男であるとして、署長は職人を釈放するように命じた。彼は家へかえる途中仲間のものに、『ラーマの思召しで、釈放された』と話していたそうだよ。

世間で暮らすことも、出家の生活を送ることも、すべてはラーマの思召しさ。だから、あの御方に

一切任せきって世間の仕事をしていなさい。

そうでなけりや、いったいほかに何をするんだね? —ある書記が監獄に入れられた。刑期を終えて出てきたら、その人は道ばたでシヤナリシヤナリと踊りでも踊っているかね? ちがうだろ。やっぱり、また、書記の仕事を見つけて勤めるだろうさ?

世間に住む人間が、もし生ジューヴァンムク前解脱者(肉体を持ちながら解脱した人のこと)になれば、いとも安楽にこの世に住んでいられる。

神についての正しい知識を得た人にとっては、この世もあの世もないんだよ。どこも同じさ。あの世があると思っている人には、この世もあるんだ」

〔以前の話——ケーシヤブ・センとの話——この世の解脱者〕

「別荘でケーシヤブ・センにはじめて会ったとき、わたしはこう言った——『この人はシツポがとれている』と。集まっていた人たちは笑い出した。ケーシヤブは、『君たち、笑ってはいけない。どういう意味かお聞きしよう』と言った。わたしは説明してやったよ。

オタマジヤクシは、シツポがとれない間は水の中にだけ住んでいて、岸が上がって歩きまわることはできない。シツポがとれると、たちまち岸にとび上がる。そうなると水の中にも住めるし、陸に上がっても住める。それと同じように、人間は無明アウツテヤのシツポがとれない間は、世間の水に落ちて、そこにだけしか住めない。無明無知のシツポがとれたら——つまり知識が身についたら、自由に陸を歩

さまわれるし、必要に応じて世間の水に入つて暮らすこともできる」

在家生活の状況——無執着の家住者

マヒマーチャランはじめ信者たちは、聖ラーマクリシュナのお口から出る神の甘露アムリタ、不滅の言葉に聞き入っている。地上に降り落ちたその言葉は、色さまざまな珠寶宝石であつて、能力の及ぶかぎり、拾ひ集められるのである。しかし、ポケットや手にこぼれ落ちるほどになると、こんどは重くて立ち上がれない。貧弱な容器いれもの（頭脳、理解力）では、到底理解こゝろしきれるものではない。

天地創造このかた、およそ人間の胸にうかんだあらゆる主題、疑問に、ことごとく回答を与えられるのだ。パドマローチャン、ナラヤン・シャーストリ、ガウリー・パンディット、ダヤーナンダ・サラスワティーなど、あらゆる経典、哲学書に精通している大学者たちが、一様に感動驚嘆して言葉もなかつたのである。ダヤーナンダが聖ラーマクリシュナに会つて、その三昧の状態を見たとき、心の底から自分自身を嘆いて言つた――

「我々は、ヴェエダやヴェエダーンタを研究しつくしたが、しかし、その成果はむしろこの大聖者マハトウルシャの方にみられる。この方を見て、学者たちはただ経典や哲学書をかきまぜてバターミルクを飲むだけであり（敗北、挫折の意）、このような大聖者たちがバターを食べるのだ（成功の意）、ということがはっきりわかつた」

また、西洋流の学問をおさめたケーシャブ・センのような学者たちも、タクールに会つて本当に驚

いた。何という不思議なことだろう。無学文盲の人が、このようなことを、このような態度で話すとは！
 と思ったのである。まさに、イエス・キリストのような言葉を田舎弁で！ 雑談をしながら、だれにも簡単にわかるような言い方で真理を説いて下さる！

イエスは、父よ、父よ、と呼んで狂人のようになられた。この方は、母よ、母よ、と呼んで気狂いのようになっておられる。この方は、単に神に関する智識の無限の宝庫であるだけでなく、神を恋慕う気持ちにおいて、汲めども汲めども、決して尽きることはないほど深いものがある。そしてこの方も、イエスのように放棄の人であり、燃えるような信念の人である。だから、話す言葉にこんなにも力があるのだ。世間の人がどんなにうまく話しても、これほどの力は決して出ない。なぜなら、彼らは放棄を實行していないからであり、燃えるような信念がないからである。

ケーシャブ・センのような学者たちは、さらにこうも思った。——「この無学な人が、これほどまでに寛大な心をどうやって持つようになったのか！ 何とも不思議なことだ！ 憎むとかの感情が全くない！ すべての宗教をうけいれて敬意を払い、誰ともいさかいをしない」と。

今日、マヒマーチャランとタクルの間答を聞いて、信者のうち、ある者はこう思った——「タクルは今日、たしかに世間を捨てるとはおっしゃらなかった。それどころか、世間並みの生活を、岩とりでのようなものだと言われて、この岩とりでのなから、色情、怒りなどの敵と戦うことができる、とおっしゃった。その上、この世間に住まないでいったどこに住むのだ？ とおっしゃった。事務員は刑務所から出てきても、また事務員の仕事をつづける、と——。詰まるところ、こういうことになるのだ——

生ジイヴアンムクッ前解脱者は世間の水にも住めるのだ、と。そのいい例は、ケーシャブ・センである。彼に向かつて、「あなたはシツポがとれているが——その他の人は誰もそこまでいつていない」とおっしゃったのだ。しかし、ここに一つ、タクルは次のことを専もつぱらおっしゃる——「時々、一人になって静かな処に住め。若い木は周囲まわりに柵を設ける。さもないと山羊や牛に食われてしまうだろう。木が成長して太くなれば、柵はこわして再び作らなくてもよい。象をつないでも大丈夫だ。一人静かな処で智識を身につけ、神への信仰を得てからなら世間に住んでも何の心配もいらぬ」と。それで、静処独居ということをもっぱらくかえして説いておられるのだ。

他の信者たちは、そんなようなことを考えていた。

聖ラーマクリシュナはケーシャブの話の後で、また一、二の世間に住む信者の話をされた。

〔聖デベンドラナート・タゴール——ヨーガ(神との交流)とボーガ(苦楽の経験)〕

聖ラーマクリシュナ(マヒマーチャランたちに)それから、シエジヨさん(原典註4)といっしよに、デベン
ドラナート・タゴール(詩人タゴールの父)に会いに行ったことがある。

シエジヨさんに、『うわさによると、デベンドラナート・タゴールという人は神のことを考えてい

(原典註4) 南神寺の所有者であるラースマニ夫人の娘婿でカルカッタの富豪、マトゥール氏のこと。非常に早い時期から、弟子のようにきわめて献身的に聖ラーマクリシュナに仕えた。

るそうだ。わたしはその人に会ってみたい』と言うと、シエジヨさんは承知してくれた。『よござんす、パパ(霊覚者に対する敬称)。わたしが連れて行ってあげましょう。彼とはヒンドゥー大学で同じクラスでしてね、親しくしていましたよ』

シエジヨさんは彼と長い間会っていなかったらしい。会うとデベンドラナートはこう言った。『君、少し変わったねえ。お腹が出て貫禄がついたよ』シエジヨさんはわたしのことを紹介して、『この方が君に会いたいと言われるから、お連れした。この方は、神様、神様』と、神のことで気狂いのようになつていらつしやるんだよ』

わたしは体の特徴を見ようと思つてデベンドラナートに言った。『体を見せてくれないかな。あなたの体を——』デベンドラナートは上着をぬいで見せてくれた。——白い肌で、その上に赤みを散らしたような按配あんばいだったかな？ そのころはまだ、髪は灰色になつていなかった。

先ずはじめに、少し高慢の気があるのが読みとれた。当たり前だろう？ あんなに金持ちで、学問があつて、有名で、人望があるんだものね？ 高慢とウヌボレの気配を見たから、わたしはシエジヨさんに聞いたよ——『なア、高慢は智識から生まれるものか、それとも、無智から生まれるものか、どっちだ？ ブラフマン智をもつようになった人が、私は学者だ』とか、私は智者だ』とか、私は金持ちだ』なんて言つて鼻を高くしていられるだろうか？』

デベンドラナートと話をしているうちに、わたしは急にいつものあの気分パレツツになつた。あの気分になると、誰がどんなふうな人かよくわかるんだよ。わたしの奥の方からヒーツヒーツと笑い声

が上がつてきた。あの気分ของときは、学者も博士も、わらくずみたひになつてしまふのさ！もし、識別心も離欲心もない学者なら、わらん人形みたいに感じるんだよ。高いところを飛んではいるが、目はいつちも墓穴の方ばかりに向けているハゲタカそつくりに見えるのさ。

この人はヨーガ（神との交流）とボーガ（苦樂の經驗）の両方を持つてゐる。大ぜい子供がいてね、まだほんの小さい子もいるんだ。専属の医者をつけてある。そんなふうにして、つまり大へんな智者ではあるけれども、世間のことをいつも思いながら生活しなくてはならない。わたしは言つたよ——『あなたは現代のジャンナカ王だね。ジャンナカは、こつちもあつちも両方とも楽しみながら、コップの牛乳を飲んでゐた。あなたは、世間に住んでいながら、神に心に向けてゐる。』と聞いたから、わたしは会いに来たんだよ。さア、神さまの話をし聞かせておくれ』

すると、ヴェータの中からあれこれ引用して聞かせてくれた。そして、『この世界は一個のジャンデリアのようなもので、そのなかの一つ一つのランプが人間の魂です』と云う。わたしは五聖樹パンテヤバテヤの柱で瞑想してゐたとき、それと同じようなものを見た。デペンドラナートの言つたことと、わたしの見たことが一致したので、この人は大そう偉い人にちがいないと思つたよ。そこで、どういふ意味か説明してくれと頼むと、こつち言つた。

『この世界を知ることのできるのは誰ですか？ 神が人間を創造したのは、自分の栄光を表現するためです。ジャンデリアを構成してゐるランプがなかつたら、すべては暗くなつてジャンデリアそのものさ見えなくなる』と』

〔ブラフマ協会では、野蛮——在家信者の大佐キチヤク〕

「いろいろ沢山話したあとで、デベンドラナートはとても喜んで、『われわれの祭典に是非きていただきたい』と言った。わたしが、『それは神の思召し次第だ。わたしはすぐごろんの通りの状態(前三昧)になるからね。何しろ、いつどんな具合になるか、あの御方次第なもんだから——』と答えたら、デベンドラナートは、『いや、ぜひ来て下さい。でも、ちゃんと腰布をまいて、肩衣をかけて下さるように——。あなたの無雑作な格好を見て、誰かが失礼なことでも申し上げると、私も心が痛みますから——』と言う。わたしはこう答えたよ——『それは約束できない。わたしや紳士にはなれないから——』と。デベンドラナートとシエジョさんはいっしょに笑い出したっけ。

次の日すぐ、シエジョさんとこへデベンドラナートから手紙がきた。——わたしが祭典を見に行くのをやめさせてくれと。肩衣も着ないようでは、あまりにも野蛮だから、とさ(一同笑う)。

(マヒマーに)もう一人いるんだよ——大佐キチヤク(原典註)だ。世間に住んではいるが、大へんな信仰者でね。お前、いつか会って話をしてみる。

大佐は、ヴェーダ、ヴェーダーンタ、シュリーマッド・パーガヴァタ、ギター、アディヤートマ・ラーマーヤナ(訳註)、みんなソラで知ってる。お前、話をしてみる。

そりゃア信心深いよ！ わたしがバラナゴルの路を歩いていたら、さつとよってきてカサをさしかけてくれた！ 自分の家に連れていって大事にもてなしてくれるよ！ ウチワで扇いだり、足をさすっ

たり、それからいろいろごちそう作って食べさせてくれる。いつか、彼の家の便所で無意識状態になってしまった。あれはとてもしきりにうるさい人なんだが、便所の中に入ってきて、足をひろげてわたしを坐らせてくれた。あんなにしきりにこだわっているのに、ちっとも嫌な顔をしなかった。

大佐は生活費がたんとかかるんだよ。カーシーに弟たちが住んでいて、そこに送金しなきゃならぬ。細君はむかしはケチな女だったが、今は出費が多いのでやりくりに追われている。

細君はわたしにこう言うんだ——『うちの主人は世間のことが好きじゃないのです。だから、時々、世間を捨てたいと申します』そうなんだ。時々、世を捨てたい、世を捨てたい、と彼は言っている。

大佐のところは信仰者の家系だ。父親も軍人でよく戦争に行つた。戦争のとき、片手でシヴァを拝み、片手で拔身の剣を振るって戦つたそつだ。

彼はほんとにしきたりを細かく守る人でね、わたしがケーシャブ・センのところに行つたら、(それが悪いと言つて)それから一ヶ月あまり此処ここに来なかつた。こう言うんだ。ケーシャブは慣習を乱す人だ、と——イギリス人といつしよに食事をしたり、娘を異ちがうカーストのところに嫁にやつて自分の

(原典註5) キラフデ 大佐——ヴィシユワナート・ウバッタエ氏、ネパール国籍。ネパール王の法律顧問で、王室代理人として総督府と連絡のためカルカッタに住んでいた。非常に謹厳なバラモンで、タクルルの熱心な信者だつた。

(訳註3) アディヤートマ・ラーマヤナ——ラーマ王子の物語『ラーマヤナ』の神話と伝説を、15世紀頃、ヴェエダーンタの不二元論を基調に改作してラーマ信仰を教理的に高めたものが『アディヤートマ・ラーマヤナ』である——春秋社「仏教・インド思想辞典」より)

カーストを失った、と。わたしは言つてやつたよ——『そんなこと、わたしに関係あるかい？ ケーシヤブはハリ称名をするから、会いに行つて神の話をきくんだ。わたしはクル(インドナツメ)の実を食べるが、枝葉のトゲなんか気にしない』それでも大佐はわたしを許さない。『あなたは何故、ケーシヤブ・センのところへ行くのですか？』と言つて。だから、わたしはこう答えたよ。ちよつと怒つてさ——『わたしやね、金のために行くんじゃないよ。ハリの名を聞きに行くんだ。じゃあ、お前は総督の家に何故行くんだい？ あいつらは異教徒だ。何故あいつらと交際するんだい？』こうまで言われると、さすがにいくらかおとなしくなつた。

でも、大佐はほんとに信心深いよ。礼拝のときは樟脳をつかつて献灯する。礼拝して、座について、讃詞を捧げる。そのときはまるで人が変わったようだ。すっかり熱中してしまふんだよ」(訳註——献灯のときには樟脳を焚くのは、樟脳の匂いで悪霊が近寄らないからである。日本では樟脳は防虫剤ナフタリンという認識があるが樟脳とナフタリンは異なる)

ヴェーダーンタ流の考えでは——聖ラーマクリシュナと幻影論

「(マヒマーチャランに)ヴェーダーンタの考え方によると、この世は幻影に過ぎない。つまり夢のようなもので、本当は存在しないものだと言う。バラマートマン(至上我)であるあの御方が目撃者で、覚醒、睡眠中の夢、深い熟睡の三つの状態を目撃していらつしやる。こういうのがお前の考え方だね。目ざめている時の状態も、眠っている時の夢と同じ程度にホントである、とね。一つ話をするからお

聴き——お前の考えに合った話を。

ある地方くに一人の農夫がいる。ほんとうの智識を持った男だ。田畑を耕して暮らしを立てている。女房があつて、ずい分おそくなつてからやつと息子が生まれた。名前はハル。両親は大そう可愛がつたよ。当たり前さね。それこそ目に入れても痛くない大事な宝だもの。農夫は心がけがいいから、村人たちみんなに好かれていた。ある日、畑仕事をしていると人が来て、『ハルがコレラにかかったぞ』と知らせた。農夫はすぐ家に戻つてできるだけの手当てをしたが、息子は死んでしまった。家族のはみな悲しがつて、何も手につかなかつた。ところが農夫だけはケロリとした顔をしている。そして、『悲しんだつてどうにもならんよ』と言つて皆をなぐさめている。間もなく、さつさと畑に出てしまった。

やがてまた家に戻ると、女房は一そう声を張り上げて泣き悲しむ。『お前さんは薄情な人だねえ。息子が死んだと言うのに涙一つこぼさないなんて——』とわめく。農夫は静かに答えたよ——『どうして泣かないのか、話してきかそう。おれは昨夜、実にアリアリとした夢を見たんだよ。おれは王様で、八人の王子の父となつて幸福に暮らしていた。それが、朝になつて目がさめてしまった。そこで、今どうしたらよからうかと考えているところなんだよ。おれの八人の王子のために泣こうか、それともお前の一人息子ハルのために泣こうかとね』

その農夫は正しい智識をもつた人だから、夢の状態が一種の錯覚だと同じように、目ざめている状態も、一種の錯覚だと見極きまめていたんだよ。たった一つの永遠の実体、それがアートマン（真我）だということだね。

わたしは何でも認めるよ。超越意識トククリイヤも認めるし、目ざめている時、夢みている時、熟睡している時の三つの意識もみんな認める。ブラフマンもマールヤーも、生きとし生ける物も、この世も、みんな認める。みんないっしょにしなけりや、目方が減ってしまうからね！」

一人の信者「なぜ、目方が減るのですか？」(一同笑う)

聖ラーマクリシュナ「ブラフマンには、生物、世界、丸ごと入っている。はじめのうち、これは実在ネではない、これも実在ネではない」と言つて究極の実在を求めていく時期は、生物も世界も否定して捨てていかなけりやならない。しかしね、我アハという意識がある間は、あの御方が一切のものになつていなさるのだと思つてのことだ。あの御方が、二十四の宇宙存在原理になつていなさるのだ、と。

ベルの実の一番いいところだけと言えば、果肉の真ん中の部分のことで、タネや皮は問題にもならん。けれども、ベルの実はどれだけの目方があるかという場合には、果肉だけを計はかつてもだめだ。目方を計るときは、タネも皮もついたままいっしょに計らなけりや——。果肉だけじゃなく、タネも皮もみんなベルの実なんだからね。

永遠不動ニテイヤであるものが、変化活動リイラするんだよ。だから、わたしはニテイヤもリーラーも、みんな受け入れる。マールヤーなんだからといって、この世界を除のけたりはしない。そんなことをすれば、目方が減るもの——」

〔幻影論マイトと制限ヴンシユク・アドヴァム不二論ジュニユーナ——智識パクテイのヨーガと信仰パクテイのヨーガ〕

マヒマーチャラン「これは実（まこと）にみごとな調和だ——永遠不動（えいぞうふどう）のものがあつてこそ、変化活動（へんげかつどう）があり得る。絶対（ぜったい）あつての相對（さうたい）、相對（さうたい）あつての絶対（ぜったい）か——」

聖ラーマクリシュナ「智者（ちやう）たちは、すべては夢まほろしだと観（み）る。神（かみ）の信者（しん）はすべての状態（じょうたい）を受け入れる。智者（ちやう）はチビリチビリと乳（ち）を出すだけ——（一同大笑）牛（うし）によつては飼料（かいばつ）の選り好み（えこの）をして、文句（ぶんく）たらたら食（た）う奴（やつ）がいる。そういう牛（うし）の乳（ち）はチビチビしか出ないんだ。選り好み（えこの）しないで何でもよく食（た）べる牛（うし）は、ドクドクと溢（あ）れるように乳（ち）を出す。

最上級（さいじやうきゆう）の信仰者（しんぎやう）は、ニティヤとリーラーの両方（りやう）を認（ま）めるから、だから、ニティヤから心が下（くだ）りてきても、あの御方（ご）の遊戯（りやう）を喜（よろこ）び樂（たの）しむことができる。上等（じやうとう）の信者（しん）は、（原典註6）ドクドクと乳（ち）を出す」（一同大笑）

マヒマーチャラン「ですが、そういう牛（うし）の乳（ち）は少し臭（くさ）いですよ」（一同爆笑）

聖ラーマクリシュナ「アツハツハツハ。その通り。——だから、煮沸消毒（ちゆいじゆう）しなけりや。

ちよつと火（ひ）にかけてあつためることだ。智慧（ちゐ）の火（ひ）の上（うへ）にしばらくのせておけば、もう臭（くさ）みはなくなるよ（一同笑う）」

（原典註6）森羅万象（しんらばんざう）いかなる處（ところ）にもわたしを見（み）わたし、わたしのなかに森羅万象（しんらばんざう）を見る人（ひと）を
わたしは必ず見（み）ている 彼は常（つね）にわたしと共にある —— ギーター 6・30 ——
（わたし——至上者（じやうじやう））

〔オーム——ニテイヤー絶対とリーラー相對のヨーガ融合〕

「(マヒマーに) オームの説明をするのに、お前さんたちは『アとウとム』というふうに言うだけのようだが……」

マヒマーチャラン「ア、ウ、ム、は創造、維持、破壊を意味しています」

聖ラーマクリシュナ「鐘のトーンという音に例えてみよう。ト、オ、オ、ム、ン。——リーラーからニテイヤに融けこむ。ストロラ粗大、ス克蘭ヌマ精妙、カイーラ原因から大原因に吸収される。覚醒、夢、熟睡から超越意識にとけこむ。鐘を打つ、ということは、大海に重いものを落として波が広がっていくようなものだ。

ニテイヤからリーラーがはじまるんだよ。大原因から、粗大體、精妙體、原因體が現われる。あの超越意識から、覚醒、夢、熟睡の、すべての状態が出てくるんだよ。そして、大海の波は大海そのものに溶けこむ。ニテイヤからリーラーへ。そしてリーラーからニテイヤへ。(風典註)トーンという鐘の音で説明

したけれども、わたしはこの事実をはっきり見たんだよ。あの御方はわたしに、際限のない意識海を見せて下さった。そこから、この、あらゆる変化活動が出てくるんだ。出てきて、またそこへ溶けこんでゆく。大心空に、チターカーシャ幾千万の宇宙が生起り、また、おこ元に溶けこんでゆく。お前たちの読んでいる本には何て書いてあるか、わたしはよく知らないがね」(訳註、チターカーシャ——無限に広がる純粹意識)

マヒマーチャラン「(真理を) 見た方々は、経文や聖典をお書きになりません。そういう方々は自らの体験に浸りきって、モノを書こうなどという気になれないのです。書くためには、ある程度の打算性が必要ですからね。見者のもつで学び聞いた人が書くのでございます」

〔世間への執着はいつまでか——ブラフマンの欲びを知るまで〕

聖ラーマクリシュナ「世間の人たちはよく、『なぜ女と金に対する執着がなくならないのでしょうか?』ときく。あの御方をつかめば、その執着はなくなるんだよ。^(原典註8)いちどブラフマンの欲喜^{よろこび}を味わったら、もう五官の楽しみや富だの名声だの評判だのを追う気持ちはなくなる。

蛾は一度光を見ると、もう二度と闇の方へは行かない。

ラーヴァナに友だちが言った。『君はシーターの歡心を買うために、いろんな姿に化けて行くが、どうしてラーマの姿に化けて行かないんだね?』するとラーヴァナは答えた。『ラーマに心を集中すれば、創造神ブラフマンの地位さえつまらぬものに見える。まして、他人の女房を欲しがることなか! だから、ラーマに化けるはずがないじゃないか』と〔^(原典註8)諷註——ラーヴァナは鬼だが、神通力があるのでいろんなことができる。別の姿に化けるときは、そのものの姿に心を集中するのである〕

〔原典註7〕 From the Absolute to the Relative, from the Infinite to the Finite — from the Undifferentiated to the Differentiated — from the Unconditioned to the Conditioned and again from the Relative to the Absolute. (絶対から相対へ、無限から有限へ、統一から分離へ、無条件から条件付きへ、そしてまた、相対から絶対へ)

〔原典註8〕 肉体をまとった魂は 禁欲しても 経験してきた味わいを記憶している
だが より上質なものを味わうことにより その記憶も消失するのだ —— ギーター 2・59 ——

〔信仰が増すにつれて執着は減ってくる——チャイタニヤ様の信者は無執着〕

「だからさ、そのために修行や礼拝をするんだよ。あの御方を想う分だけ、世間の事物に対する執着が減ってくるんだ。あの御方の蓮華の御足を信仰すればするほど、世俗の欲は薄くなってくるし、肉体の欲びに関心がなくなるんだよ。他人の妻を見ても母親のように感じるし、自分の妻は宗教生活を送る上の、有能な助手か友だちのようになる。動物的な衝動はなくなつて、神々のような気持ちになつてきて、世間に全く無執着になるだろうよ。そうなつたら、たとえ世間に住んでいても、生前解脱者になつて自由自在に動きまわれる。チャイタニヤ様の信者たちは無執着になつて世間に住んでいた」

〔信愛者と智者の深い秘密〕

「(マヒマーに) 正真の信愛者は、ヴェーダーンタの考えを千度も聞かされて、この世は(人格神も含めて)すべて夢だ、ウソだ、と言われても、自分の信愛を動かさしはしない。幾分、信仰が弱まることはあつてもね。すりこぎの肩が葦原に落ちて、それが元で、ヤドウ一族は滅びてしまつたのだ。」

シヴァに縁のある生まれの人は智者になる。ブラフマンのみ真実在、この世界は錯覚と、こういう方向にどうしても心が傾いてゆく。ヴィシユヌに縁のある生まれの人は、愛と信仰に導かれて、どんなことがあつてもその愛と信仰は失わない。智的な推論をしたあとで、ちよつとばかり愛と信仰が減つ

ていくような気がすることもあるが、最後には千倍も強くなって戻ってくる——ちょうど、すりこぎがヤドウ一族を滅ぼしたようにね」

母親孝行と聖ラーマクリシユナ——ハズラー氏のこと(原典註9)

タクール、聖ラーマクリシユナの部屋の東側ベランダでハズラー氏は称名をしている。年令は四十六、七才。タクールの同郷人である。かなり以前から離欲出家の志篤く——外を歩きまわって時たま家にかえるだけである。家には何がしかの土地があり、それで妻と息子娘たちは生計を立てて

〔訳註4〕『すりこぎ……』この話は「マハーバータ」の物語からの引用。パーンドウ軍に味方してクル族との戦いに勝利したクリシユナの一族であるヤドウ族は時が経ち驕り高ぶり、聖仙を侮辱したためにすりこぎに呪いをかけらる。呪いを恐れすりこぎは砕かれ水辺の草原にばらまかれるが、時が経って、砕かれた木くずから芽を出したおびたたい木を武器にして殺し合いが起こり、ヤドウ一族は滅亡する。これは、信愛というすりこぎは、ヴェーダーンタの教えをいくらか聞かされて砕かれても、失われることはなく、むしろ増大するという例えである。

〔原典註9〕ハズラー氏（プラタプ・チャンドラ・ハズラー）——タクール、聖ラーマクリシユナの生誕地カマールブクル村の近くのマラゴル村が彼の生誕地である。三十八才位の時に、妻子を残して修行生活に入った。議論好きで、他者を批判したが、聖ラーマクリシユナを熱烈に信仰していた。タクールは、「筋書きを面白くするために」そこにいるのだ」とふざけておっしゃっていた。故郷に戻ってベンガル暦一三〇六年チヨイトロ月（西暦一九〇〇年）に他界した。死期にのぞんで、タクールに対する満腔の信頼と敬慕の念を披瀝した。年令は六十三、四才であった。

いる。しかし、千タカほどの借金があつて、ハズラー氏はそれをいつも気にかけて、どうにかして返済したいとあれこれ努力していた。カルカッタには始終行き、そこでよく訪れるターンタニヤのイーシユワラ・チャンドラ・ムコバツダ工氏は、ハズラー氏を極めて丁重にもてなし、サードゥに對する如く奉仕している。タクール、聖ラーマクリシュナは彼の面倒を見て身近に住ませ、衣服がボロになれば新しいのを買つてやり、いつも何かと世間話をしたり、神の話をしたりしておられる。ハズラー氏は大へんな議論好きである。何か話していると大ていの場合、すぐ大議論に發展し、次から次へととどまる所を知らない。ほかに用のないときはきまつて、東側ベランダに坐つて数珠を繰りながら称名しているのが習慣であつた。

ハズラー氏の母親が病氣にかかつたという報らせが来ていた。ラームラルが帰郷の際立ちよつたところ、母親は彼の手をにぎつて山ほども懇願して言つた。『叔父さん先生(タクルのこと)に、私の嘆きをお伝えして下さい。叔父さんからブラタブ(ハズラー)に、家に帰つてくるようにと言つてもらつて下さい。死ぬ前にいちども息子に会えるようにして下さい』それでタクールはハズラーに、『いちど家にかえつてお母さんに会つておいで。お母さんはラームラルにさんざ口説いたさうだよ。お母さんを嘆かせておいて、神を求めたつてどうなるものか。いちど会つて、またここへ来なさい』と勧めておられる。

信者たちがそれぞれ散つて行つた後、マヒマーチャランはハズラーを伴つてタクルのそばにきた。校長もいる。

「マヒマーチャラン」(「タクールに向かって笑いながら」——先生！あなた様に折入ってお願いがございませぬ。あなた様はなぜ、ハズラーに家へ帰れとおっしゃったのでしょうか？世間に戻ることは彼は望んでおりませぬが——)」

聖ラーマクリシユナ「ハズラーの母親がラームラルに嘆いたそうだから、そう言ったんだよ。三日でいいからお母さんに会ってこいと。母親を嘆かせておいて神を求めて修行したって、成功すると思ふかい？わたしはプリンダーヴァンに住みつこうとしたんだが、母のことを思い出して——お母さんはきつと泣くだろうと思つたから、すぐ思い直してシエジヨさんといっしょに此処こゝに帰ってきた。

それに世間に出たって、ハズラーのような智者なら何の恐れもない筈だろう？」

マヒマーチャラン「はっはっはっは、先生！ほんとに智慧を得た場合はさうでしようけれど——」
聖ラーマクリシユナ「アハハハハ、ハズラーはみんな出来上がつてるよ。ほんの少し世間に心が引かれてるが——子供たちと、ちよつとした借金のためにね。おばさんの病気はすっかりよくなつたが、まだちよつとゴタゴタしてるけどね——」(一同大笑)

マヒマー「ハズラーの智者たる所以ゆゑんはどこにあるのでしょうか、先生？」

聖ラーマクリシユナ「(笑いながら) おやおや、お前、知らないのか。誰だつてこつ言つてるよ、『ハズラーという人物がラースマニ家の寺にいる』と。ハズラーの名前はあけても、こちら(タクール自身を指す)の名前は誰も言つてくれないだろう？」(一同笑う)

ハズラー「あなた様は比類なき御方——あなた様と比較できるようなものはこの世にありません。

だから、誰もあなた様を完全に理解することはできないのです」

聖ラーマクリシュナ「比較できないものが相手じゃ、話にならんからね。それで、こちらの名前を誰も口にしないというわけだね？」

マヒマー「先生！ 彼に何がわかりますか？ あなた様が与えられたお言葉通りにすればいいのです——」

聖ラーマクリシュナ「どうしてさ。お前、これに聞いてみる。この人はわたしにこう言ったよ、あなたと私とは貸し借りなしの間柄だって——」

マヒマー「とにかく、この人は議論をしすぎますよ！」

聖ラーマクリシュナ「ときどき、わたしにも説教してくれるよ（一同大笑）。議論しているときわたしは、怒鳴ってやったこともある。ところが、議論したあとで蚊帳かやの中に入って横になっていると、言った言葉が気になって、どうも気分が悪い。それでまた、ハズラーのところへ頭を下げに行く。すると気が済むんだよ」

〔ヴェーダーンタと純粹真我シュッダートマ〕

「（ハズラーに）お前はなぜ、純粹真我シュッダートマのことをイーシュワラ神といふのかね？ 純粹真我は不動で、三つの状態（覚醒時、夢時、熟睡時）の目撃者だ。創造、維持、破壊の活動を考えるとき、わたしはあの御方を、イーシュワラ神と——と言うんだよ。純粹真我はどんなものかといえれば、それはちょうど遠く

の方にある磁石のようなものでね、針は動いているが、磁石は音もなく不動だ」

日暮れの詩うたとイシャンとの会話

日暮れが近づいた。タクールは行きつ戻りつしておられた。校長がたった一人残って床の上に坐りこみ、何ごとか沈黙考しているのをごらんになって、タクールは突然、やさしく声をおかけになった。「なあ、白生地のシャツを一、二枚持つてきておくれよ。わたしは、誰が持つてきたものでも使えるというわけじゃないから——大佐キヤブツに頼もうと思つていたんだけど、お前が持つてきておくれ」

校長は立ち上がつて、「はい、かしこまりました」と答えた。

日が暮れた。タクール、聖ラーマクリシユナの部屋には樹脂香がたかれた。タクールは神々にごあいさつをなさり、尊い真言マントウをとなえ、称名ジヤバをしておられる。

部屋の外も、例えようもない美しさだ！ カルティク月の白分七日目である。清らかな月の光を浴びて寺院の建物はほほえみ、聖なるバギーラティーカワモ（ガンガー）の河面が、眠つている幼な児の胸のようにかすかに息づいている。

ガンジスは満ち潮になつてきた。献灯アールテの鈴のひびきは、やわらかく光る河面のチャプチャプという音とまざつて遠くの方まで運ばれ、やがて、暗みに消えていった。

お寺では、一どきに三つのお堂の献灯アールテだ——カーリー堂と、ヴィシユヌ堂と、シヴァ堂と。十二のシヴァ堂では、それぞれに祀られてある象徴石リシガに一つ一つ灯明が捧げられるのだ。役僧がお堂からお

堂へとまわって行く。左手に鈴、右手に五ツ皿のランプをもち、従者をしたがえて——従者は鐘を持つている。献灯がはじまると同時に、境内の南西隅にある奏楽塔から、縦笛などの楽器が奏でる大そう甘美な調べがきこえる。喜びに満ちたこの毎日の祭りは、それは、人間に思い起こさせてくれる——悲しみに沈まないように、と。この世で幸、不幸はつきものなのだ。苦しみも楽しみも、あるがままに任せよう。宇宙の大実母がいらっしやるのだ。そうだ、私たちのお母さんがいらっしやるのだ！ 喜べ！ 女中の子は満足に食べられなくとも、学校へ行けなくとも、家屋敷がなくとも、でも、母さんはしっかり胸に抱きしめてくれる。母さんがいるのだ。母さんの膝にもたれて甘えられるのだ。継母はや義理の母ではない——真実の、生みの母親なのだ。私が誰で、何処から来たのか、どうなるのか、何処へ行くのか、すべて一切は母さんが知っている。取り越し苦勞をしているのは誰だ！ 母さんが知っている——私の母さんが、私に肉体と心と命と魂を下さった大実母が——。それに私は、知ろうとも思わない。もし何か知る必要があれば、あの母さんが教えてくれる。心配しなくてもいい！ 大実母の子供たち、さあ、みんな喜べ！

世界は外の月光に明るく照らされて笑っている。内では聖ラマクリシュナが神の愛の飲びにひたつて坐っていらっしやる。イシヤンがカルカッタから来ていて、また神様の話をはじめたところだ。イシヤンは信念の強い人だ。いつも、「ドウルガーの名をと覚えて家を出るなら、その人といっしょに三叉の鉾をもったこの上なく強いお方が、いっしょについて行って下さる。道中、何の危険もない。シユーラパーニ(シヴァ)が自ら護っていて下さるのだから——」と言っている。(訳註、シユーラパー

ニ——棍棒こんぼうを手にした者の意でシヴァ神のこと

〔信によつて神をつかむ——イシャンにカルマ・ヨーガの教え〕

聖ラーマクリシュナ〔イシャンに〕お前はほんとに信念が強いね。わたしらはとてもかなわない（一同笑う）。信によつてこそ、あの御方に触れることができるんだ〕

イシャン「ハイ。そのように心得ております」

聖ラーマクリシュナ「お前は称名ジヤバしたり、毎日欠かさず礼拝祈祷したり、それに断食やプラスチャラナまでしているそうだが、実に感心だ。心の底から神に惹かれるようになると、あの御方がその人にそういう修行をおさせになる。功德を期待しないでそういうことがつづけられたら、きつと、あの御方をつかむことができるよ」

〔ヴァイデー・バクテイとラーガ・バクテイ——行事カルマを捨てるのは何時いつか〕

お経にはいろんな行事をしると書いてある。だから、それをていねいに実行する。こういう種類の信仰をヴァイデー・バクテイ（ヴァイデー——順法的）と言うんだよ。もう一つ、ラーガ・バクテイ（ラーガ——情熱、赤熱）というのがある。これは神への恋慕から、神への愛から生まれる信仰だ——プラーラダたちのような信仰だ。その信仰にすすんだら、もうお経にあるような行事をする必要はなくなる」

付き人の胸中

日が暮れる前に、モニは外を散歩しながら考えた——「ラーマの思召し」というのは、実に結構な言葉だ！ これによつて Predestination (運命・宿命)・Free Will (自由意志)・Liberty (自由)・Necessity (必然) というような論争は終息する。私が泥棒に連れていかれても「ラーマの思召し」、私がタバコを吸うのも「ラーマの思召し」、私が泥棒するのも「ラーマの思召し」、私がボリスにつかまつたのも「ラーマの思召し」、私がサードゥになったのも「ラーマの思召し」、私が「おお主よ、私に悪念を持たせ給うな。私に泥棒などさせ給うな」と祈る——これも「ラーマの思召し」、善の意志も不善の意志も、あの御方が与えて下さる。——でもここに、一つ疑問がある。不善の意志を、なぜあの御方はお与えになるのか——盗みをしようという気持ちを、なぜあの御方はお与えになるのか？ その答えについては、タクールはこうおっしゃるのだ——「あの御方は、動物の虎、ライオン、ヘビといったひどい奴のなかにもいなさる。毒のある木や草にもなりなさる。それと同じで、人間のなかのコンソ泥や強盗にもなりなさる。どういふ理由でそうなりなさるのか、そんなこと誰が説明できる？ 誰が神を完全に理解できるのか？」と。

「でも、もしあの御方がすべてをなさるのなら、Sense of responsibility (責任感) というものがないか」と言うのかい？ どうして？ なくならないよ。だって、神を知らぬ間は——神を見るまでは、百パーセント「ラーマの思召し」といふ気持ちにはなれないからだ。あの御方をつかむまでは、

時たまそういう感じになっても、すぐ忘れてしまう。神に対して完全な信を持つまでは、どうしても罪と徳の感じがするし、いやでも責任感がつきまとう。オウムの口真似みたいに、口でだけ「ラーマの思召し」と言っていたって、そりやだめさ。神を知るまでは、あの御方の思召し」と私の思召しは一つにならない。私は器械」ということが完全にさとれない間は、あの御方は罪・徳の感じ、幸・不幸の感じ、浄・不浄の感じ、善・悪の感じを残しておいて下さる。責任感を残しておいて下さる。そうでなければ、あの御方の現象であるこの世が先に進んでいかないだろう？」

タクルの信仰について考えれば考えるほど、何とも形容できぬ神々しさに感嘆するばかりだ。ケーシャブ・センはハリ称名をするから、神のことを考えているから、それだけの理由でいそいそと会いに行かれる。ケーシャブを骨肉みうちのようにお思いになる！——大佐キヤブテンの注意などに耳もかさずに。ケーシャブは西洋に行っていた。西洋人といっしょに食事をしていた。娘を別のカーストのところ嫁にやっつた。そんなことはみなどうでもいいことなのだ！クルインドナツを食かべるのに、トゲやケバなど気になるか？信仰の糸で、人格神の信者も無相かみの實在の信者も一つになる。ヒンドゥー教もイスラム教もキリスト教も一つになる。四つの階級カーストも一つになる。

神に信仰をもつことこそ光榮サナトナ・ダルマであり、勝利なのだ。徳高き聖ラーマクリシュナ、あなたこそ勝利者だ。あなたは、永遠ユニバーサルの宗教の普遍的理想を肉体を持って顕現なされたのだ。だからあなたは、これほど人を惹きつける力があるのだ！あなたは、すべての宗教の信者を差別することなく、親愛の情をこめて胸に抱きしめて下さる！あなたが試金石（価値の標準となるもの）とされるのは、心のなかに神

に對する愛と信仰があるかどうか——。もしそれがあつたら、たちまちその人はあなたの親戚になる。ヒンドゥー教徒がほんとうに信仰していれば、それはあなたの身内なのだ。——イスラム教徒でもアッラーをほんとうに信仰していれば、それもあなたの身内なのだ。——クリスチャンでも、もしほんとうにイエスを信仰している人なら、それもあなたの親類だ。「別々の国の別々な方角に流れている河も、みんな海に入れば一つになる。すべて皆、海をめざしているのだ」とあなたは言う。

タクールは、この世を夢だとはおっしゃらぬ。そんなことすれば目方が減るから、とおっしゃる。現象幻影論者ではない。制限不二論なのだ。なぜなら、生物や世界を虚構だ、心の錯覚だとはおっしゃらないからだ。神は真実在、そして、人間も真実在、世界も真実在。生物世界という条件のブラフマン(実在)なのである。タネと皮を除けてしまつたら、完全なベルの実は得られない。

私はタクールからこう聞いた。この宇宙世界は大、心空に顕現し、やがて時期がくれば消えていく——大海に波が起こり、また、海そのものに消えていくように！ 大歡喜の海に、無限につづく活動の波！ この活動の始まりはどこか？ 終わりはどこか？ それは言葉で説明する方法はない——心で考えることもできない。人間はどの程度のものなのか——人間の知性はどの程度進んでいるのか！ 大聖者といわれる方々は、三昧に入つてその永遠の至高靈を見たと言ふ。永遠の活々たる神に對面したと。たしかにその通りなのだ。なぜなら、聖ラーマクリシュナもそう言つておられるから——。しかし、この肉眼で見たのではない。明知の目とでも言うべきものを通して——。その明知の目を得てアルジュナは、神の無限の形相を見たのである。その目を通して、古代のリシたちはアートマンを

ありありと見たのであり、その明知の目を通して、イエスは天にいます父に毎日のように会っていたのだ。その目は如何いかにして得られるか？ タクルのお口から聞いたところによると、それは神に対する忘我の情熱によって得られるのである。では、その情熱は如何いかにして得られるか？ 世間を捨てなければだめなのか？ でも今日、そのようにはおっしゃらなかった。（訳註、マハー・チターカーシャ——無限に広がる偉大なる純粹意識）